



茗會文彙

八

1冊5
489
8





茗會文談卷之八

目錄

- ① 仁德天皇の御製歌
- ② 老莊
- ③ 圍碁名手
- ④ 騎馬
- ⑤ 年賀
- ⑥ 楠公
- ⑦ 受領

- ⑧ 糖 艱
- ⑨ 自得
- ⑩ 新田の説
- ⑪ 菜蔬
- ⑫ 新茶
- ⑬ 志のぶ摺
- ⑭ おるといふ詞
- ⑮ 儉約
- ⑯ 五戒

- ⑰ 儒中の毘西
- ⑱ 勘當
- ⑲ 阿紫
- ⑳ 西行雪の歌
- ㉑ 夜
- ㉒ 容氣
- ㉓ 憤怒
- ㉔ 異見
- ㉕ 兵略

廿六 自然

廿七 三絶

廿八 繭紙

廿九 文具

卅 虎の畫

卅一 日本画

卅二 華表

卅三 古代米價

卅四 收斂

卅五 クワタツル

卅六 本朝制度

卅七 性善

卅八 和漢相似語

茗會文談卷之八

錦城 大田元貞才佐 著

① 仁德天皇御製衣歌

むらし朝廷よて日本紀を講せられける其終り
に郷食宴あり代々の天子を題よとりて其功德を
頌贊し奉ることあり今その哥残れり是を日本
紀竟宴和歌といふ其内は

得^天鷲鷲天皇

左大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣時

平平

たかこのまのほりてみれハあめのしこ

よもまけふりて今そまみぬる

又新古今集賀部

仁徳天皇御製

高きやまのほりて見れハ煙とつ

民のら至まハまきまひまける

僧契冲いふこれハ往古の歌のすうこまあら
かハ元慶の竟宴ま此帝を得奉りて誰人々の

よこころあるへし朗詠集ハ刺史の哥とす
刺史ハ國の守ふれはもつはら此哥の心ある
へきやま心を得てつくれあるへしもし
又此哥ハ延喜式の竟宴ま藤原左大臣のよこ
玉へる哥のらく敗りころか大前似ころ哥あ
りといへりある人大成經の内の哥の部ま新
古今の通りあるして即ち仁徳帝の御製とあ
るを信するあり誤りといふへし元より大成
經の偽書ころハ明あり

③老莊

老莊ハ無為ヲ著す禪宗ハ著せざるヲ著す孔子
ハ著すハけれハ著し著す至しけれハ著せず

③囲碁名手

道仙といへるハ至りて碁の上手あり堺まで人

々碁を打けるを道仙ふらめ居たり其後其時の
碁ヲ平けし人道仙ハあひて先日碁をさきより
かく打くる時よりくあひしらむあは勝と成る
へきとおもひ侍る如何と問ひし道仙いふ自
分の打碁あらねばよしあし見へぬ体まへハ
如何あらむも知らずと答へりとあてせまハ脇
目ハもくといひ唐土までも當局則迷旁觀瞭
然といへり是皆下手の上のことあり道仙ほど
の上手ハ至れハ己ら碁ヲあらせれハ精神専ら

あらめかまは精微のところへ見えめふるへし
道仙ほどありて名言を申出せり

④騎馬

目下何ぞしといひし朝鮮流の馬のりのあり聞
て人ありて馬よのりて申こりしを顔打しらめ
て馬をのりてこそ申へけれ馬よのりといふて
ハなきこと申き

⑤年賀

人の長壽を祝しよろこぶハ礼ありミづらう長
壽を願ひ賀進をまうくるおごハこのましから
すおのれ長壽ありとて世にふいほどの益々あ
る又おのれ死しても子孫あるハ長壽といふへ
し不幸にして子孫なくハよ一人多けれは猶お
のれら如し又長壽をいとふまもあらず畢竟

あふこ次第あり

⑥楠公

楠河州の帝に奏せる語に正成死ざり内はらふ
らざ聖運ひららふへしとあり此ことハ北条の
ミに限らず足利氏異^品面の時も其心あらん湊
川戦死の事河州をいき過る論あり宮方終に勝
利なきをさてりてマゼと自殺せるとあり是河

州の本心よこかへり然らハ俗にいふすて鞭の
こぐみあり名將ハさマあらざ此時廟策よろら
ず諸方の官兵敗績してのら仇難し耻辱の死を
せよよりハマおもひての死あり且河州ハ^惟幄に
策をめぐらし臨機應変ハあり有ても短兵野
戦ハ長する所ニあるまじ^道道、道あらばあ
そ君をすて其身をほしむ事、マせよや野史の
よく所信するよくらず

⑦ 受領

漢の宣帝の詔は郎官ハ出て百里ヲ宰ノリマレ
ト天下を俱トスルハ二千石ありとあり天下の
政ハ心をもよせ玉ふ君ハウクこそあるへけれ日
本中ころ國の守をざりやうといひて甚たいやし
めりいやしめらるれど其身ハ富さうへとり此
より上の權下トうつりニり

⑧ 糠蝦

大海のほとりトすむ糠蝦ハ池沼をトらひ空中
を飛ぶ糠蝦蠅蚊の為めトハ けところ原文
錯誤あらん
ひろく諸子の大言を好む此類あり

⑨ 自得

隣家ト夜飲し夜更類てハ鬼客散すト遠きト帰

る人ハサぞ道の程くるしうらんを此ハ早く聞
こ入りていぬれバ心よく覚ゆるこ又遠方の夜
陰おそく帰る時ハ主人又ハ隣家の人ハ酒食を
傾きて直にふさバめしうらんを此ハ道の遠を
や酒もやくさめ食も稍く稍^{消れ}てよしと思ふ
是ハ極めて瑣事ありしく他事ハ心を用ひハそ
の所々を應じて自得の場あらん

⊕新田の説

ある人のいふ薩摩の國には新田をひらく事
むろしよりあしとあり其昔文之といへる人あ
りさつ至て新田の説おこり^し時此文之ひて
り同心せずしていふ新田より米出れば古田に
てそれほど米の出来不足するあり然れハ多く
の金銀を^裁減し人事を費して新田つき立んハ國
の利あらずといひしあり是尤の事とて國のおそ
てとあり永く新田のさくあし至れり哉文之の

いへる孟子孟子草萊をひらき土地とするをい
ましめり文之ハ朱注の四書工夫しめてか
付くる人あり是子よ水は新衢をたどれば古
衢おとろへ新寺をこつれば古寺さびしく新参
を寵す水は古参うらむ勢ひしかり

①花木蔬

世に花木蔬の類其時子先ちて用ゆるを好む

ゆゑ商人利を得んとて種々子いそむ是皆奢
侈をこねり子水人いやしむべし漢安帝の詔曰
凡諸薦新味多非其節或樹養強熟或穿掘萌
芽味無所望而大折生長と見えればもろこし
の古へもろくのどそくふり大に生長を折ると
は天物生物の氣を挫きこふふの心よて道理をか
しへていへり是より先華奢の風を長じてをい
まふむしあほやけよいものぞも定りの時
節ありてみどりよ早きに用み玉はぢとぞ

⑬ 新参

何の由もなしといふを知らず新参の人ハ立身を願ふ也
急ぐの役ハ打てまり前後をかたりえず勤
むれば用立ともあり此れども元来其とあま
まるといふに多きはすゑをいへぬまり譜代古
参の人々をさへかへ道なき才知あらしむる
やうよ養ひてそれハ役をあらんほせよきこ

とはあるまじき事

⑭ 志のぶ摺

志のぶずりのこと今奥州は其石もてありといふ
ふかえらしむかことをあとの類ふるすすも
は今も絹布をするよそのくを置いて色をす
り付るまり今いふはくのろせまり志のぶずり
てハ信夫郡満ていふことまり今の加賀満ので

とし其模様朝廷の服色造染の定制よりあら
が種々よこどりよらむるよりみくくすこの縁
語ありもじちいるは今の床ありとしの糸を
もどりくるあり將ころもふくよ用ふ新は襲の
服ふまどし
石ありしてそぬよする付るといふは無稽の説お
り

⑭ おるちいふ詞

おるちいふはかきあるとくむの心あり弓の勝
負も今もねりて参らんちいふにあすりあらは
こあすりん狂言の詞よきあしるあつて一重ね
ちいふも同じ

⑮ 儉約

むくし五万石の諸侯よら今の五万石ありさ

さて費ゆる所ハ十万石のすがとあり是より家
中を知行のひうへたり百姓より志ほりせり富
高の金銀をかりてうへさず新田金山の利を得
んちすいんちもすこうぶがされに儉約の令
を出すよ上下和睦せぬよりよの令もおこすは
ぬが終子勝手巧者の人をうへるふり
五萬石の入をばくりて出すをすれにゆうす
しも儉約するよ及はず富高をよのゆ^いるても
ふまふり

國子三年の儲あければ國をはいるれすと古人
いへり今は先納又年貢とて来年の年貢を先
へちり立るゆやむべし

①六 五戒

わくし百濟國の人參を女真國もちぢきさの
薬は大病を治し人の死を救ふさひてあまふ
ひけり女真の人は人參といふ名を知らざれば

ヤガてちりて見て是は我國も多しあり是よ
りよきも有りたすひ功能すこれとりて天の
御所いひみあれに其國限りて事足ふも他
國の物を用ふよ及ばずんや我國の人參を
さぬるをやちて置ざりけりちあん

宋の文帝佛法を歸して太平を致さんるもい
いと群臣よ尋られけるよ何尚之答ていふ
家五戒を持す是太平をいころの道即仁義礼智
信よりちいふ是とともて女真國の人我國の

人參を捨て百濟の人參を用ふがごとし文帝の
天下を治められし仁義礼智信よあふみあら
ぬばいらんを五戒をとつとを得ん

①七 儒中の醫

京師よ何くしといふ醫者あり醫ハ巫醫樂師
又ハ醫ト百工よぞひちつよいれをにくと我ハ
儒中の醫ありと稱しけるよあし知らば世間の

醫ハ儒中はあらずとあもへるありおよそ世間
小飯をくひ衣を着屋中すす人よ交り世を
渡すものに其業はともあれ皆儒中の人なり僧
の人倫をとつていへども人倫よりうき世
にあまねす所詮遺經教經のおきての如くハ
行はず然れども是も又儒中の人なり然れども
加しの儒とあもへるハ俗といふ物知り物よ
詩文を業として門戸をとつてといふ

①六 久離

「目録ハ其當ニ依ル」

今の世人家は不孝とておぼやけよゆらしりけ
てかんぢうすよまなふハ多く色を好む花柳は
放蕩するよりねるれり此はろどよあらくま
らばかんぢうするハ至らず然れにさせる不孝は
あらず此外ハ一種の不孝あり色はまよふあ
らずかんぢうするハ至るもあらざる常は世を

たのしく渡るべき父母としてうぬへーめらよ
あぢきあふおもはくむ此罪うへりて深し是は
いふある所あり起るも見るまおのれが智恵を
もて親よひまくらべおのれまきりておもふ
より此心うへりて改りかゝるも歳のと
るは随分ちて増長するこ

さきふ不孝に陽症の不孝もて治しやあし後の
不孝に陰症の不孝もて治しやあし

是を治せんちあらば其子おのれが智恵の父母

のうゝあふふよしと思はば少くもあらうまよ
へし

⑨ 阿紫教育

「目録よゝゝ阿紫七のこあし」

むくし吐谷渾國の阿まふは阿紫七といふあり
けり五十人の子をもてり臨終は皆よびよせて
箭を五十一筋とり一ちかづけ子よ渡しにづら

ら一筋もち上座の子よあそへて手よておら
むるよおれとり 諸子のもてる筈之おくもり
て一ツよからしむるよ折れず諸子よつとて
からしむるよ何とぞす此時阿紫市していふ國
家をともつもふのそちこりあり汝一人づこ
うるれば人よ亡さる五十人一致すれば國さ
ゆるに汝ら兄弟三おくむつまじくせよと遺言
せり

道理をよくとて一より無れもふほ本を知ら

ず上よ阿紫といふとき君あればこそ 五十人の
子皆々一致す阿紫死して五十人を一ツよす
るほ七の人其内よふくして一事七のほすその
頭とちりて五十人をすぶるハ徳と才とあり
阿紫も是をおもを其教育あるべきに聖王人の
法よ胃子あまごを教ふの道あり後世英傑の士あま
にあらず皆印利の旧習よえりて此一路を欠く
其法ハ賢者をえらびて師傳とするよあり賢者
上さまよふければ下より上へも志もよりあじ

此は權あり故服せずあやそ唐やまての人主の
國をひらき玉ふを見よよ人才は多く下より奉
用し玉つり後世に至りては缺かひのあとはぬよ
り家柄よて用ひらるゝあり
然る時に猶もて人才を成就するの方ありよき
と心然らば士大夫貴人の内よはいくらも賢者
出来よきと

㊦ 西行雪の歌

雪あられ降りてさむきはよ忍びとえそ窓をひら
き詠よま、西行法師の

世は捨つ身はあまものもあゆへとも

雪のふる日にさむくこそあれ

せいへる哥をくちかさむ

此法師の真率ありしいあるを愛しさけあそめて給へ
ける天地も亦風流よてかく草木よ知らぬ花
をさうせ水よあらぬ壁をあらぐ庭よとらぬ

ぬ珠をくき又稍：酒肴の元亦へも 阿きて八直富
は應じて形氣の娛もありいんや 聖賢の心の
樂いけばアリとありふよ此法師ハ何を苦しみ
て世をすて身をふまゆのとありひあすや佛道
よ入うへハ殊勝ふハ阿れぞりくありはあすも
ありあんくし

敬ハ京
のあや
まじり
あらん

却敬山々作れり時習新知といふ書といふ

淳庵ハ時俗ハ世よあるを以て樂まじし昔をあ
はせて亦是を樂まといふ只聖賢ハ元のみあさ

よとのくむへき所を樂みそのまさは憂ふべき
所を憂ふといふ

世後

周礼春官の職ハ女巫掌歲時祓除 浴注如今三
月上巳 水上之類とあり鬼神よつきて災を除
き福を求むるあり文字示よ従ふあり 示ハ音
岐よて祗と同一鬼よつくるをよハ示の字を用

るふり俗は禾篇は作る字の似るよりより誤
れりあり

平祝家これに附會し日本は籾のとき國也禾
篇は籾ふあり故實ありといふそれ不祥をたら
ひのそくは籾のときとあづらち非るくとき
ひ過をうごふり一のひときをある

② 容氣

人よりときといふる七あり形氣せかく又荷
擔氣せかくときか畢竟左傳といへる容氣のこ
とあるべし只聖人の上りときあし又くときあ
るより賢者七知するもあらん柔善の人よ
は又くときあし

(廿三) 憤怒

むろし若年の時太平記の注を見侍りしは坊門
の宰相七楠河州七軍評定の時宰相殊の外声
色あらくありし時河州も少く怒り見えけり河
州一生は怒のありしは只此時よりすまて怒り
はらうやまきるもあり人の怒りよるぬも怒れ
ば人の怒りのまぬをするよりせへつり古の君
子怒りをあらすの誠はあまと見えたり怒る

よ此の人まぬをあらすといつるはとくいひせり
より少年の時あれどもこの一言を佩服せりて
ちくくあらるるもあまはずといへどもあやひ
出れば怒火をしめすの良言ありころを得て
書を見れば雑駁の説も人の益ちあるべきふ
り

(廿四) 異見

本郷あそりの大名の臣は小野姓の兄弟あり弟
ハ名を良器といひて少し学問せり兄は休園て
て豪氣よくて書をよまざる其子もく其氣よく
て孝順あらず弟これをも喜みて讀書あやす
めり

あふ兄のいふは教といふと異見といふとつ
て用ゐらぬものありこれハ金をすへふる桶
みひちつもとせまはこが子も孝子ちやりすこ
て人を善人ちまづきありといふ

是ももより戯あから座興といひくちやれば取
上て論するよとらざるれせ世の功利富貴は
よとれをまがす人ハうる事を聞てよろこび
思ふより教の用とあさぬハ大やう然り然るよ
これハ童牛の 債取の牙といふ術をさうましく
て長大剛強はよりて後は教を以てとめ直さん
ちするあり用とあさぬもころりあり

此論ハさく置ぬ金とあへよろこぶて人を
道ひうんちせば先此方は金と賭ずる手段を

するうゆらす人をひきまき人の利をわすめせ
り賄賂をむさぼる人せふるへし然るは人を善
みするひるまひもあらん其身は禍害あらんこ
れもまこと行はぬぬるちまればまごも教へ異
見するふか何よりまへより買たる魚よふるまあ
りて用よ立とぬるもゆれせ魚をとむるいいつ
ちても魚屋よりありて類より

廿五 兵略

兵略は皆陰に属す只弓矢の二陽器あり古人繁
藤の弓の説は握りの上は三十六の藤を用ひ是
地の三十六舎あり握りの下は二十八の藤を用
ひこれ天の二十八宿あり上あるものを下は置
下あるものを上は置是地天泰の卦なり上はつ
の長きは鴉の口なり下は日あり下のちちうき
ハ兔あり月ありといふ
余又是は説を付て三十六は四九三十六にて太

陽の加ずあり二十八は四七二十八にて少陽の
數上下を合して六十四即ち六十四卦の象あり
四季の筋を用ふるハ四象のちごとあり其外附會
ちぬに皆とくふつりある理となくある器
は外ふはあらうむべふよりふ聖人易ふありて
睽の卦の象として天地の功用をあらし玉へり日
本より弓矢の徳をむらしより他は異は申傳ふ
るもの之あるるもあらうし

廿六自然

天地の間万物あり人亦水を用ふるは其物につま
て其固有する所を用ふるありいとて小きを
よしてとて一しては今この世の人の用ふる腰の
さげものよね附せいかのあり是にちひさき
瓢を用ふる自然のすがとあり煙草ゆかにゆらす
まうせるありこの筒よハ竹のらう尤よろそ近頃
ハこざら木よ孔をまほし外をまるとけつり漆

あせぬり用るふり大よひがろせふり竹ハ自然
七孔ありて外よ皮ある由念垢つくとあし是を
捨て木を用也笑あづし凡夫のするまの類
多し

⑦三絶

高雄の鐘ハ三絶といふある人のいつらくおよ
そよのと二絶あれば多くいとしゆうす三絶は

るべきハ謡曲の声よく少しよきも拍子を知ら
ざれば全うらず弓藝ハ力よく中りもすれば
容体正しくらざればそはうす人ハ才あり藝云
あれど徳ふければよみするまの類

⑧繭紙

もろろの日本人日本の繭紙を用ひて書すといふ
こと見えたり繭紙ハ己が國あていつある紙也

いふをくらぐり玄巖詩話を見侍しよ

以朝鮮厚繭紙作鯉魚函

ちいふ事見えくらぐり朝鮮の紙は日本のちりの子
紙のちちきあり紙の風はむらありしいやくく
くれば繭紙はちりの子紙あるごとしちりの子
のよきをまきずきせいふ土氣のあきあり蠟を引
うちあらしして蠟地ちりの子ていふありとらし
思ふよ古のちりの子紙は蚕のまをまて作りけ
るかゆろくくの紙も綿料紙せいふに綿をえ

作るとありちりの子ていふに紙のちち鯉卵の
殻の色のごとき故あるべし

廿九 文具

目録は文具はつくるにあせりふ

青貝の器は唐と書む琉球は極めて精緻なれも
も古手あらざ宋の方汎が泊宅編よ

螺慎器は本倭國より始まる万物のうらち

を精しくとくニ出す今の世の予が集むる類
ひよあらず

といつり然れに今唐細工をて調法する古き青
貝器ハカへりて日本細工あらんも知らず

③ 虎の画

日本人のかける虎の画ハもろろのを見てう
つちあらんいづれもとけきさまあり享保の初

年ハ南蛮より象を貢りけり諸人あまぬく真象
を見て是までの象の描のよからぬとしる虎行
如病鷹立如眠とあれバ虎もとけく書くに誤り
あらん

④ 日本画

近年唐流ハ繪をらく事せよをせり茅一桐ハ
繪抄ハ古人画書本を彩本といふ其草之書を經ざ

る所は自然の妙ありていへり彩本は今の繪本
ふりすまて宋の画を見るは筆あらく丹青を少
く用ひてあつさりあり明に至りての繪は多し
精微よてうつくく色どゆり是傳摸移写の画
よて氣韻骨法の妙あり日本ありいはくくろく
と繪細工繪のどちも狩野家の繪に此草々々々
所を学ひて屏風失くそりて今唐の繪とど
よいつばらくせちもひて摸しふらふは看場の
見たり

③ 華表

事物紀原は喪葬に用る箸を包ひつらねて周公
始て華表を爲すもあり墓あり所のふりあり
こし此を日本ありて神祠のちりみせするは誤り
ありたりぬハ上古の門のうとありて

③ 古代米價

顯宗天皇二年は稻斛は金銭二文七あり清和天皇貞觀八年は白米一石七貫二百文黒米四貫百文もあり是は銅銭なるべし此米價の貴賤よこちよ雲泥のちがひあり其上貞觀銭の位今時よりは貴なるべし然れは後世ちてもあはるべしあまきありいふあるべし考ふるは遊手閑民多らかり五穀は年々少く不幸にして旱潦ありあへ即倉よきしき故也

④ 聚斂

むかし一城の主取粽の功者ふるものをめし置玉へりその人ある時農人どもを召集めて納りとの員數を申渡しけり例ふやけりて多ければ農人ども承引せずその人申けるは其アてもハ元來農人百姓の体知らざるよりさへ思ふあり農人ハ身よきしきふものを着し繩の

帯をしこらふて髪をとばぬいぬのえとき粉子
ぬりをませどんじよこしらへ菜大根をきり込
まして石う水をして食し家の松の柱をほり込や
ぬハ麥こらよてふきねるとせいふぬのえとき
物うして雨も雪も寒も暑も田島は居
るべしからすれにぬのもいらす米ゆよく出来
て十分よ上へも納めらるゝあり今汝ら有物
を見ぬによき木綿をぬのすきはよめてすそ長
ふ着し外へ出るゝ絹ゆの着させの帯つゝき

の羽をりきんらんのとむこ入藁屋張の煙管羅
紗のきせる筒糸もちぬひをよき立ひきの油を
ぬり立食物ハ一年中米のぬりありちまつちい
ふが麥飯チリ家ある青ど、うをくきむふまよ
物ずきのすまひをこし高をぬてるぬの、心ハ耕
作ハ下人下作よ作らせその身ハ茶の湯鞠うと
ひを稽古し京大坂へふむさみよ出るありみる
を見まぬよ水吞百姓下作つくり下男は百姓の
ぬやろハふし此通りありハ作り出す米を皆々

おのれが所得ありては次第は貧乏の後よはこ
らぶきの下も得居るまを先といふ通りよ心
得は定りの通りよ上へ納めて家もよよけいあ
らん上よりあれにありとけまんぎせらんては
く玉はず今汝らを一とびこらめて髪を由はさ
ねに國の御為るもあらず汝らが為るもあらず
是をよく心得に己がいふ所の無理あらざるを
知よこしせいりちを

是を旁より見れば先一とあり世太平は治ま

ればおのづから花美ありは上下ともは繁の
志うらくむる所は然るは此奢りをする農人の
一村の内は十人ともありしもの者とも耕作ばり
りありてはこの奢はあらず面々商人はありて
商の利を得るよりあり都て云ふ近き百姓
ハ尚以然る水呑百姓も見ると見まぬは奢りて
つふぬきもいふ華のたまものたまきて島かす
あせ見及へりむくより耕作も巧者ありし
地より出るものも多し然れハ暮しかとの見よ

くあるもろせりあり

是らをいりいりいりあて乞食同前のさまふ
此きは先仁君の心はあらさまふし

仁徳天皇のみろせのりも百姓の富に即朕
が富もありもありしまふらふれにへどてあり
一二人めつらふ下人うてもあまり見苦しき
さまふれに主人心よりうらましく其國一年の
納りに昔まかはらぬ花美の世の勢ふれば
國用一倍の再見ありふの一倍の費用を百姓の

高して利をせり自由よある料理を皆上へ納め
小百姓の巧者よありて取實多ふありつあぬき
買ん料物を皆上へ納めよせば百姓の心服
せぬも 物子 ありありありありあり

世五クワツル

跂の字あて足をつまどつるありあきほるてハ
貪の字あてむさむ欲するありあきをくこせ

ひまぐあきをむさきせいふに雅語あるよし
まゝの詞よいまどまらず人をりらんずるを
今の人ふめせいふすてよ万葉も源氏もい
へり

⑦ 本朝制度

聖武帝の御時下道直備後子吉備也唐より帰
り唐礼百三十卷大行曆樂書を獻してより日本

の礼樂制度皆唐よりあらひ玉り
仁明帝の詔は天下儀式男女の衣服皆唐様を用
ひ五位以上の位記唐の法に従ふて多擬唐
その玉へり貞觀年中阿部高隆の議文も本朝
制度多擬唐家といり
その時唐朝は行はるゝを傳聞し玉ふてか
あらざ礼を改め玉りねらひるふ三代の礼は
あらひ玉はぬ也大禮よつさくら缺典有り

世性善

ある人此のも人の性に善ありて傳へ承はるる

ある世此のも悪人あるや

習ひよりあり

その習ひはいつくより来るや

世の人ありうらるるあり

その世の人の習ひはいつくより来る

是又人より受くるあり

然らば性中も元來善ある也其惡くき習ひの
出来たること

己れ答ていふよく問詰玉ひるれ物語のふがき
を退屈せずよく聞玉へ人の性はとい性あり善
由ある惡もあし只善をすべき種の何るあり是
をとり玉見付て孟子の性善の説をばい玉
へり荀子告子のちもがらの知る所もあらざる
て教乃習ひはいつくより来るをいふよやん
り善より来る礼記も礼は飲食よりはじまるる也

見えたり此礼ハ制度文物の礼あれハ聖人のこ
ころ一玉へるありほまぬくいほし人の悪心ハ
飲食より始るていふことしいうんちあれハ小児
二三歳の時の欲ハ食物の之あり是時より後ハ
食物の側より何を見ればやげててりて食ふ是
盗むていふ心あり何れも只欲するまの心ハ
り父母これを見て食の過んるをうれして志
かりいまむむふを取食すれば何れハ打又ハ
つめちるより此後ちりて食せんてするたまは

必らず父母の顔を見てあるひハやめ又ちりて
ハそやくうらす是を又強くいまむればそれ
より父母の見ぬ時よりうんちする心出来るこ
り
さてその^{食物}父母の見ぬ時より取食して也知らず
いふ是悪の始ありその始ハとて食ひときま
のちり食ふあるがいろくちありゆて行ハ到頭
ぬすみ偽りの心をこころうらへるより是を習ひて
いふあり

至つてかゝる生れ付し小兒ハセリ食んセす
子の心ハ同トけれセ父母のいまゝめ玉ヲはわ
れをゆはれみ玉ハ故ナリト子心もあひて
みどりまちらず場ハ生れ付くるハその心ふく
食ひときまゝいあゝめをたれまゝりくくし
ちるハ盗むハ同しセいふ事はいまど知らぬセ
もいかりをおそれてからす心出来るナリ相セ
ゆふふ小兒いつれもかゝのろちし是も互ハ朝
夕ふれ又めのセうゝづまあセ皆ハ此内ナリ生

長くゝるものよて是も相まゝゝゝゝて終ハ盜竊
詐偽の人セある

始め性を受る時盜竊詐偽の心ハうつてあきて
セありこの如くして取食ひ食ひても食はぬセ
いふ心うゝとき小兒ハ早くあゝきと心得て増
長せずあろろある小兒ハ其心出来ずそれナリ
ハ成人しゝる者が悪人セある事ナリそれ習ひ
よりて同じ小兒ふれども大ハ善ハ悪のこりち
出来るナリ

韓退之は不吟味ある儒者にて左氏傳のうそば
あしを誠と心得て三品の説を立之れより性ハ
善ありて大小優劣のとがひありといふるを
知らざるありその大小優劣をいかに人にてよ
とがひありてその面の如し是余が先人の説よ
て今是をまきのぶるのこ

卅八 和漢相似語

梁塵秘抄樂歌よ

四方山の人の守りよする鉾を

神の御前よいそひつるよ

とあり

此四方山ハ四方の山といふていふく唯四方
あり此言今よ残りて四方山のをあしするとい
ふよりとて世上のはあしゆのがとりをするよ
り

ゆろてしの俗語よ江湖の詞あり江七湖よはあ

らず又只世上せいふ心きり和漢よく似たる
あるものあり

茗會文談卷之八終

